

## 没後 50 年 鏑木清方展

東京国立近代美術館(竹橋) 2022. 03. 18~05. 08 京都国立近代美術館巡回



かぶらきよかた  
「鏑木清方」(1878~

1972) は、明治初期~昭和期にかけての浮世絵師・日本画家・随筆家で、作品は、風景画は稀でありほとんどが「人物画」で、東京の風俗を写した「風俗画」というべき作品が非常に多い画伯である。

本展は、「生活をえがく」「物語をえがく」「小さくえがく」の3章で構成されている。

画伯の代表作として、長い期間所在が不明であった《築地明石町》《新富町》《浜町河岸》の三部作が、2019年に再発見されて当館のコレクションに加わったため、この作品をはじめとする「約110点の日本画」で構成される「清方」の大規模な清方没後50年の回顧展として開催されている。

「清方」は、浮世絵系の挿話画家からスタートし、その出目を常に意識しながら晩年まで庶民の暮らしや文学、芸能の中に作品の主題を求め続けていた。

そうした「清方」の関心の「変わらなさ」に注目し、展示はいくつかのテーマに分けて作品を並列的に紹介している。(作品保護のため一部展示替えあり)

### 《浜町河岸》1930年

思い出の土地である当時の墨田川沿いの浜町河岸で描かれた三部作の一つの作品で、川沿いの浜町を表わすように松竹梅の着物の下に覗く青い流水文で、華やかで初々しい趣を持った踊りの稽古帰りの娘を描いた秀作品である。

モデルの若い女性は、少し上気してほほを赤らめていて、扇子をくわえてお師匠さんに、少し注意をされた箇所を思い出したよう可愛い仕草である。

### 《築地明石町》1927年

水色の着物に黒い羽織でつんと立っている女性姿は、浮世絵に見られる清らかさが感じられる画伯の「近代美人画を代表する作品」のひとつで、明治30年代半ばの明石町光景と合わせ物思う表情で振り返る姿に心情を託している。

作品は、44年も所在不明であったが、久しぶりの公開で話題となっている。